

中国古典詩における精読の探求

クローズ・リーディング

「精読 (Close Reading)」は、文学研究の歴史において特別な意味合いを負わされたこともあるが (作品を作者や時代背景から切り離して分析する研究方法であるとされるなど)、ここではごく一般的な意味合いで用いる。すなわち文学作品のテキストを丁寧に、精密に読み解くこと。これが文学研究にたずさわる者の常に立ち返ってゆくべき根本であるのは疑いない。精読の探求を目標として掲げるゆえんである。

対象として取りあげるのは、六朝・唐・宋の詩。狩野が陸機「贈潘尼詩」、遠藤が李賀「金銅仙人辞漢歌」、甲斐が陸游「庵中晨起書触目」について、それぞれの関心のもと精読を試み、それらを結びつけるかたちで浅見が中国古典詩の読みをめぐる問題点を抽出し、全体の討議につなげる。

パスカル『パンセ』に「速く読みすぎても、ゆっくり読みすぎても、何もわからない」という。「遠すぎて近すぎても……」あ

るいは「浅すぎても深すぎても……」と言い換えてもいい。これは常識的には、両極端を排し中庸を得た適正な読解をこそめざすべきだと説いた言葉として受けとめられよう。われわれの精読もまた、正しい距離と速度と深度を保ちつつ、テキストを正しく理解することをめざすべきなのだろうか。

ここではむしろ次のように問うてみてはどうか。そもそもテキストの読解において「正しさ」とは、何かが「わかる」とはどのようなことをいうのか、と。われわれは「正しさ」を見失うことを恐れずに、テキストに近づいて、深く、ゆっくりと読んでみたいと思う。結果として何もわからなくなるかもしれない。だが、ときには「わからなさ」のなか途方にくれることも必要かもしれないではないか。

多くの方々が積極的に討議に参加されることを願う。

浅見 洋二
狩野 雄
遠藤 星希
甲斐 雄一

* 以上は、日本中国学会第六八回大会要項冊子第四八・四九頁に掲載されたパネルディスカッションの紹介文である。